

小学校の教育課程における特別活動の意義と課題 —学級活動「望ましい人間関係の形成」に係る実践研究から—

阿部 敬信¹⁾ 神田 文聡²⁾ 新城 浩仁³⁾

Significance and Challenges of Special Activities in the Curriculum of Elementary School:
From Practical Research Related to Classroom Activities
“Developing a Trusting Relationship Among Pupils”

Takanobu ABE Fumisato KOHDA Hirohito SHINJO

【要 旨】

本研究は、まず、小学校の教育課程における特別活動の意義と役割について、平成20年3月の小学校学習指導要領の改訂のポイント、学級経営、生徒指導及び道徳教育との関連から考察を行った。特別活動は、小学校教育では特に重要な役割がある学級経営の充実において、学習指導と生徒指導の両輪を結ぶ大切な領域であるであることを明らかにした。次に、特別活動の目標の中心的な事項である「人間関係」の形成を図るための具体的な指導内容である学級活動の「望ましい人間関係の形成」について、2つの実証的な実践研究のレビューから、学級活動における今後の課題として「学級活動で学んだことを各教科等や朝の会等の他の教育活動で定着を図ること」「学級活動の授業の終末における振り返りの充実」「学級活動の授業に対して児童が意欲的に取り組めるように学級集団の状態に応じた工夫を行うこと」を明らかにした。

【キーワード】

特別活動 学級活動 人間関係 構成的グループエンカウンター
ソーシャルスキル教育

1 特別活動とは

特別活動とは、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の教育課程に設けられた領域の一つである。例えば、小学校では、小学校の教育課程を規定している学校教育法施行規則第50条に次のように定められている。

第50条 小学校の教育課程は、国語、社会、算数、理科、生活、音楽、図画工作、家庭及び体育の各教科（以下この節において「各教科」という。）、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間並びに特別活動によって編成するものとする。

¹⁾ 別府大学短期大学部

²⁾ 杵築市立杵築小学校

³⁾ 大分県立別府支援学校

つまり、特別活動は、各教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間と並んで小学校の教育課程を編成する領域の一つであり、他の領域とともに小学校における教育目標を達成するための重要な教育活動なのである。

2010年3月の小学校学習指導要領改訂では、文部科学省は「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の「3.教育内容の主な改善事項」において、その5番目に「体験活動の充実」を挙げ、「○ 発達の段階に応じ、集団宿泊活動、自然体験活動、職場体験活動などを推進（特別活動等）」として、今後の学習指導要領の重点課題である「体験活動」の充実を図るために、総合的な学習の時間とともに特別活動が重要な役割を果たしていることを示している。

今次学習指導要領改訂の基本的考え方を示した2010年1月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」¹⁾においては、「子どもたちは、他者、社会、自然・環境の中での体験活動を通して、自分と向き合い、他者に共感することや社会の一員であることを実感することにより、思いやりの心や規範意識がはぐくまれる。また、自然の偉大さや美しさに出会ったり、文化・芸術に触れたり、広く物事への関心を高め、問題を発見したり、困難に挑戦し、他者との信頼関係を築いて共に物事を進めたりする喜びや充実感を体得することは、社会性や豊かな人間性、基礎的な体力や心身の健康、論理的思考力の基礎を形成するものである」²⁾として体験活動が子どもの社会性や豊かな人間性、そして論理的思考力を育む基盤となる活動であるとし、「核家族化や都市化の進行といった社会の変化やそれを背景とした家庭や地域の教育力の低下等を踏まえ、学校教育における体験活動の機会を確保し、充実することが求められている」³⁾と述べており、現代の子どもを取り巻く社会的背景の変化により特別活動の役割がこれまで以上に重要であると述べている。

特別活動は、学校教育法施行規則第50条に示

されている順からも明らかなように、学校教育の教育課程においては比較的重要視されてこなかったが、昨今の子どもを取り巻く社会的背景の急速な変化により、学校教育の中において相対的に重要な役割を担うようになってきているといえる。

2 特別活動の目標

小学校における特別活動の目標は、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）において次のように示されている⁴⁾。

望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。

さらに、小学校の特別活動は「学級活動」、「児童会活動」、「クラブ活動」、「学校行事」の4つの内容からなるとされており、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）においては、各活動・学校行事について、次の目標がそれぞれ示されている⁵⁾。

表1 各活動・学校行事の目標

内容	目標
学級活動	学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。
児童会活動	児童会活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員としてよりよい学校生活づくりに参画し、協力して諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。
クラブ活動	クラブ活動を通して、望ましい人間関係を形成し、個性の伸長を図り、集団の一員として協力してよりよいクラブづくりに参画しようとする自主的、実践的な態度を育てる。
学校行事	学校行事を通して、望ましい人間関係を形成し、集団への所属感や連帯感を深め、公共の精神を養い、協力してよりよい学校生活を築こうとする自主的、実践的な態度を育てる。

これらの特別活動全体の目標と、各活動・学校行事の目標を比較検討すると、特別活動の目標の中心となる事項が明確になる。

つまり、5つの目標において文言まで共通しているのは、「自主的、実践的な態度を育てる」ことである。これが特別活動の目標の中心となる事項であると考えられる。そして、次に「集団活動を通して」という文言である。活動によって、「学級」、「児童会」、「クラブ」、「学校」と特徴的な集団があることから「集団」については名称が異なっているが、特別活動においては「集団活動」によって指導を行うという方法原理が示されているといえる。

さらに「望ましい人間関係」が共通しているといえる。全体の目標においては「望ましい」は「集団活動」の前に置かれており、各活動の目標においては「人間関係」の前に置かれているという違いはあるが、これも共通しているといえる。「自主的、実践的な態度を育てる」ことの次に「望ましい人間関係」を形成することが特別活動の中心となる事項であると考えられることができる。

2010年の小学校学習指導要領の改訂で特別活動の目標に新たに加えられたのは「人間関係」であった。さらに、道徳の改善を踏まえ、道徳的実践の指導の充実を図る観点から「自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」が加えられた。これにはキャリア教育の観点からも加えられたと考えることができるであろう。

また、特別活動の全体の目標を受けて、各活動・学校行事にも目標が設定された。これもまた、現在の特別活動の中心となる事項が「人間関係」であることを示しており、さらには、4つの内容ごとに目標を設定することによって、それぞれの内容における特質のある「集団活動」によって特別活動の目標の中心的な事項である「自主的、実践的な態度を育てる」という方法原理と中心的目標が明確にされているといえるのである。

3 特別活動の特質

特別活動は、戦前においては課外活動とされ、教育課程に位置づけられた教育活動ではなかったが、戦後の学校教育における教育課程の基準を最初に示したと位置づけられている1947年に当時の文部省が公表した学習指導要領一般編（試案）においては、教科の一つである「自由研究」にその原型を見ることができる⁶⁾。「自由研究」は、次の改訂である1951年には廃止されてしまうが、小学校においては「教科以外の活動」、中学校及び高等学校においては「特別教育活動」として教科の外であるが教育課程の一つの領域として位置づけられる。1968年の改訂において、それまで別の領域として定められていた「学校行事等」と統合されて小学校及び中学校においては「特別活動」という名称となる（ただし、高等学校においては「道徳」という領域が設定されていないことから「各教科以外の教育活動」となる）。そして、次の改訂となる1977年の学習指導要領改訂により小学校、中学校及び高等学校において「特別活動」となり今日を迎えることになる⁷⁾。

現代において特別活動は、その特質として小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年8月）で次の2点が挙げられている⁸⁾。

「第一は、集団活動を特質とすることである。この集団は、単なる遊び仲間の集団ではない。それぞれの集団には、活動目標があり、目標を達成するための方法や手段を全員で考え、共通の目標を目指して協力して実践していく集団である」としている⁹⁾。これは、すなわち特別活動における集団は、偶発的な集団である「群衆」ではなく、共通の目標に向けて集まった「組織」であるということである。「組織」には目標が存在し、成員相互のコミュニケーションにより共通の目標となり、成員一人一人が集団への規則意識をもち、貢献しようとする。特別活動における集団活動は組織的な活動であるということになる。

次に、「第二は、集団による実践的な活動を

特質とすることである。特別活動は、集団活動であるとともに、集団の実践的な活動でもある。実践的な活動とは、児童が学級や学校生活の充実・向上を目指して、自分たちの力で諸問題の解決に向けて具体的な活動を実践することを意味している。したがって、児童の実践を前提とし、実践を助長する指導が求められているのであり、児童の発意・発想を重視し、啓発しながら、「なすことによって学ぶ」を方法原理とする必要がある¹⁰⁾。これはすなわち特別活動の方法原理とは「なすことによって学ぶ」であり、児童自らが実践することで、教師は実践がうまく進むように助言的役割をするということである。

4 学級経営と特別活動

学級経営とは、「学級を教育の目的に沿って効果的に組織し運営すること。学習指導と生徒指導を総合し、学級内の人間関係の発展を促すなどのほか、学級の物的環境を整備するなどの教育活動」のことである。つまり、これは学習指導と生徒指導を車の両輪として、相互に関連づけながら指導することにより、学級内の児童相互及び教師と児童相互に望ましい人間関係を構築し、教育の目的を総合的に達成させるために必要不可欠なことであるといえる。とりわけ小学校においては学級担任が学習指導のほぼ全てを担当することがほとんどであり、学級担任の児童に与える影響が大きいため学級経営が学習指導の正否を握る重要な役割を果たすことになる。

小学校学習指導要領（平成20年3月告示）では、学級経営について次のように示している¹¹⁾。

日ごろから学級経営の充実を図り、教師と児童の信頼関係及び児童相互の好ましい人間関係を育てるとともに児童理解を深め、生徒指導の充実を図ること。

学級経営の充実がすなわち生徒指導の充実に

つながると、生徒指導の観点から学級経営の重要性について「第一章 総則」の「第4 指導計画の作成等に当たって配慮すべき事項」において取り出して示しているのである。続いて、小学校学習指導要領解説総則編（平成20年8月）においては、この事項に関して、「生徒指導を着実に進める上での基盤は学級であり、学級担任の教師の営みは重要である。学級担任の教師は、学校・学年経営を踏まえて、調和のとれた学級経営の目標を設定し、指導の方向及び内容を学級経営案として整えるなど、学級経営の全体的な構想を立てるようにする必要がある」としている¹²⁾。生徒指導の観点から小学校の学級経営における学級担任の果たす役割の重要性について述べているといえる。

学級経営と特別活動との関連においては、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）の「第6章 特別活動」の「第3 指導計画の作成と内容の取り扱い」で〔学級活動〕の配慮事項として、次のように総則と同様の文言で重ねて示している¹³⁾。

学級経営の充実を図り、個々の児童についての理解を深め、児童との信頼関係を基礎に指導を行うとともに、生徒指導との関連を図ること。

まさに「このことは、学級経営の充実のために、児童によりよい生活づくりや人間関係づくり、日常の生活や学習への適応などを内容とする特別活動が重要な役割を果たすことを示したものである¹⁴⁾。

5 生徒指導と特別活動

生徒指導とは、生徒指導提要¹⁵⁾において、「一人一人の児童生徒の人格を尊重し、個性の慎重を図りながら、社会的資質や行動力を高めることを目指して行われる教育活動のこと」であり、「教育課程の内外において一人一人の児童生徒の健全な成長を促し、児童生徒自ら現在及び将来における自己実現を図っていくための

自己指導能力の育成を目指す」ものであるとされている¹⁶⁾。この生徒指導に係る定義をみると、生徒指導という教育活動が目指すものと特別活動の目標をほぼ重なるものであり、「学級活動などの特別活動は、集団や社会の一員としてよりよい生活や人間関係を築き、人間としての生き方について自覚を深め、自己を生かす能力を養う場であり、生徒指導のための中核的な時間となると考えられます」¹⁷⁾と述べられているように、特別活動は、教育課程内で生徒指導を行うための領域であるとも考えられる。先に述べたように、学習指導と生徒指導が学級経営の車の両輪であるならば、まさに学習指導と生徒指導という車の両輪をつなぐ車軸のようなものである。

6 道徳教育と特別活動

道徳教育については、小学校学習指導要領(平成20年3月告示)の「第1章 総則」の「第1 教育課程編成の一般方針」の「2」に示されているが、その最終段落においては次のように示されている(下線は筆者が付した)¹⁸⁾。

道徳教育を進めるに当たっては、教師と児童及び児童相互の人間関係を深めるとともに、児童が自己の生き方についての考えを深め、家庭や地域社会との連携を図りながら、集団宿泊活動やボランティア活動、自然体験活動などの豊かな体験を通して児童の内面に根ざした道徳性の育成が図られるよう配慮しなければならない。その際、特に児童が基本的な生活習慣、社会生活上のきまりを身に付け、善悪を判断し、人間としてしてはならないことをしないようにすることなどに配慮しなければならない。

また、前掲書の「第3章 道徳」の目標の後段は次のように示されている(下線は筆者が付した)¹⁹⁾。

道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、道徳的実践力を育成するものとする。

前述したように、「第1章 総則」における「教育課程編成の一般方針」で示されている道徳教育の方針や、「第3章 道徳」で示されている目標を見ると、特別活動で示されている目標と同じ文言が示されていると同時にその方法においても体験活動という特別活動で重視されている方法と共通になっている。道徳教育は、当然、学校の教育活動全体を通じて行うものであり、各教科、外国語活動及び総合的な学習の時間と密接な関連を図りながら進めていくものであるが、とりわけ特別活動との連携は必須のものと考えることができる。これは「同学年や異学年の友達、地域や施設などの多様な人々、自然などとふれあう特別活動における望ましい集団活動や体験活動が、道徳性を養うための重要な場になっている」²⁰⁾からである。つまり道徳の時間などに資料や読み物をとおして考えたことを、特別活動の集団活動や体験活動で実践して振り返ることができるからである。特別活動が「なすことによって学ぶ」という方法原理をもっているからこそ、道徳の時間などで学んだことをさらに補充、深化、統合できるともいえるのである。

7 学級活動とは

これまでみてきたように、特別活動は小学校教育では特に重要な役割がある学級経営の充実において、学習指導と生徒指導の両輪を結ぶ大切な領域である。この特別活動の内容の一つである「学級活動」は、小学校学習指導要領(平成20年3月告示)の「第6章 特別活動」の「第

3 指導計画の作成と内容の取り扱い」の〔学級活動〕の配慮事項が総則と同様の文言で重ねて示されているように学習指導と生徒指導の両輪を結ぶ領域の中心的な役割を担うと考えてもよい。

その学級活動では、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）において、いずれの学年においても取り扱う内容を〔共通事項〕として、「(1)学級や学校の生活づくり」と「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の二つを次のように示している²¹⁾。

〔共通事項〕

- (1) 学級や学校の生活づくり
 - ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決
 - イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理
 - ウ 学校における多様な集団の生活の向上
- (2) 日常生活や学習への適応及び健康安全
 - ア 希望や目標をもって生きる態度の形成
 - イ 基本的な生活習慣の形成
 - ウ 望ましい人間関係の形成
 - エ 清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解
 - オ 学校図書館の利用
 - カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成
 - キ 食育の観点から踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

「(1) 学級や学校の生活づくり」の活動は、「教師の適切な指導の下に、児童自らが楽しく充実した学級や学校の生活をつくっていくことを内容」であり、「児童の発意、発想から様々な活動が生まれ、学級や学校の生活を向上させようとする活動へと広がっていく過程で児童一人一人に自主性や社会性、集団の一員としての責任感などについて実践を通して育てるととも

に、望ましい人間関係を築こうとする態度を形成する」活動である²²⁾。つまり、教師が助言的な指導をしつつも、児童の話し合い活動を中心にして主として学級の運営を児童が主体となって進めようとする内容である。

それに対して「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」は「日常生活や学習への適応及び健康や安全に関するもので、児童に共通した問題であるが、個々に応じて実践されるもの」であって、「児童の共同の問題として取り上げ、協力して実践する「(1) 学級や学校の生活づくり」との違いを踏まえて、教師が意図的、計画的に指導する必要がある」内容である²³⁾。つまり、児童主体の活動であることは確かであるが、(1)の内容に比べると、教師が主導的役割をもって計画的に指導することで、児童個々が実践的活動を行うという内容となる。

この「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「望ましい人間関係の形成」は、前にもみたように特別活動の全体の目標と各活動の目標に共通に示されており、特別活動の中心的な目標を達成するための内容となっている。小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年8月）では、「具体的な指導内容としては、友達と仲よく、仲直り、男女の協力、互いのよさの発見、違いを認め合う、よい言葉や悪い言葉、親友をつくる、などが考えられる」と示しており、さらに「望ましい人間関係の形成の指導として、社会的スキルを身に付けるための活動を効果的に取り入れることも考えられる」とも示している²⁴⁾。前者においては、例えば構成的グループエンカウンターのような心理カウンセリングの技法を取り入れたエクササイズと振り返りにより自己開示を進め円滑な人間関係を育てる活動を指していると考えられる²⁵⁾。後者においては、例えばソーシャルスキル教育のように、話の聴き方や質問の仕方など、良好な人間関係を形成し、それを維持していくために必要な知識と具体的なコツや技術を教える活動を指していると考えられる²⁶⁾。

8 学級活動における実践研究

そこで、本稿では特別活動の学級活動「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「ウ 望ましい人間関係の形成」において、児童理解の方法としてQ-Uアンケートを行った上で、構成的グループエンカウンター（以下、SGE）を用いて、学級集団の望ましい人間関係の形成を図った実践研究（以下、実践研究Ⅰ）²⁷⁾と、同様にQ-Uアンケートを用いて児童理解を図り、その実態に応じたソーシャルスキル教育（以下、SSE）を行った実践研究（以下、実践研究Ⅱ）²⁸⁾を比較検討し、特別活動の学級活動「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「ウ 望ましい人間関係の形成」の実践的課題を明らかにすることによって、今後の特別活動の学級活動の実践に資する知見を提供したい。

(1) Q-U アンケートとは

Q-U アンケート（「楽しい学校生活を送るためのアンケート（QUESTIONNAIRE-UTILITIES）」）とは、教師の日常観察や面接法による児童理解の限界を補い、児童個々の状態および学級の状態を理解するための客観的で多面的な資料を提供することをめざした診断尺度であり、河村²⁹⁾によって開発された。Q-U アンケートには、「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」と「居心地のよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」の2つがある。

「学校生活意欲尺度」とは、学校・学級の生活集団ないし諸活動に対する帰属感や満足感などを要因とする児童の心理状態をいう。ヒストグラムと学校生活意欲プロフィールが得られる。

「学級満足度尺度」とは、児童が自分の存在や行動が級友や教師から承認されているか否かを示す「承認得点」と、不適応感やいじめ・冷やかしなどを受けているかを示す「非侵害・不適応得点」の2つの得点から、児童の学級生活

における満足度を測り、それぞれの得点を全国平均値と比較して4つの群に分類するものである（表2）。児童一人一人のそれぞれの得点を、「承認得点」を縦軸とし、「非侵害・不適応得点」を横軸としたグラフの上にプロットした図のことを「Q-Uプロット図」という。

表2 「学級満足度尺度」による4つの群

群	得点	児童の心理状態
学級生活満足群	「承認得点」が高く、かつ「非侵害・不適応得点」は低い	不適応感やトラブルも少なく、学級生活等に意欲的に取り組んでいる児童である。
非承認群	「承認得点」が低く、かつ「非侵害・不適応得点」も低い	不適応感やいじめ被害を受けている可能性は低いが、学級内で認められることが少なく、自主的に活動しようという意欲が乏しい児童である。
侵害行為認知群	「承認得点」が高く、かつ「非侵害・不適応得点」も高い	対人関係でトラブルを抱えているか、自主的に活動しているが自己中心的な面があり、他の児童とトラブルを起こしている可能性が高い児童である。
学級生活不満足群	「承認得点」が低く、かつ「非侵害・不適応得点」は高い	いじめや悪ふざけを受けている、不適応になっている可能性の高い児童で、学級の中で自分の居場所を見いだせていない児童である。いじめ被害の可能性や不登校にいたる可能性が高い児童とも考えられる。

Q-U アンケートの結果に基づいて適切に対応することで、不登校やいじめ、学級崩壊などの問題の予防につながる事が期待される³⁰⁾。

(2) 実践研究Ⅰ「一人一人の児童が互いに認め合う集団を目指して～構成的グループエンカウンターとQ-Uを用いた学級活動」

本研究は、「的確な学級集団の実態把握に基づいた構成的グループエンカウンターによる学級活動を実施することで、より良い人間関係を築こうとする実践的な態度を育てることができるだろう」という研究仮説に基づいて行われた。大分県内の小学校第4学年27名の児童に対して、学級活動の時間にSGEを45分×3回実施

した。事前のQ-Uアンケートから子どもの得点の分布が学級生活満足群に集まりルールとリレーシヨンの確立した親和的な学習集団であることが分かったが、学級不満足群に3人、非承認群に3人と2割の児童が何らかの理由で学級に対して満足していないことも分かったことから、エクササイズは、研究の実施者と対象となった学級の担任で協議を行った。「してあげた、してもらったこと；児童に今までの学校や生活の経験の中から「してもらった」「してあげたこと」を思い出させ、ワークシートに記入させる。対象は「友達」「家族」「先生」などだれでもよい。」「信頼タッチ；2人組になって目をつぶり、視覚が無い状態でタイミングを合わせながらタッチをする。」「???さんからの手紙；学級の児童全員に、10枚のカードを配り、これまでの学校生活の中で気づいた学級のメンバーの親切や良い行いを褒める手紙を書く」を選定した。SGEの実践の事前及び事後にQ-Uアンケートを実施して、SGEによる指導の効果を検証した。

その結果、「学校生活意欲尺度」の学校生活意欲総合点の平均については指導前後に有意差が認められるほどの変化はなかった。「学校生活意欲尺度」のヒストグラムについては分布に有意差が認められる変化がないのは同様だったが、12点から15点間の2名が減少し、全体的に高意欲群に移行する傾向がみられた。「学級生活満足尺度」においては、分布状況に変化がみられた。学級生活満足群・非承認群の人数が減少し、全く該当者がいなかった侵害行為認知群に5人の移行が見られた。Q-Uプロット図の分布が横型となったことから、児童間の活動意欲の向上は見受けられるが、基本的な学級のルールが希薄になり児童間のトラブルが増える可能性が高くなる分布となった。リレーシヨンの確立を優先したエクササイズを集中的に実施した本研究の指導によって、事前のQ-Uアンケートの時点では、対象クラスの中で定着していたルールが希薄になってしまった。望ましい学級集団の状態とは、Q-Uプロット図では、学級内のすべての子どもたちが学級生活満足群

に入っている状態である。リレーシヨンの形成が不十分であるからといってリレーシヨンのみに焦点化したエクササイズを行う一方で、学級集団のルールを維持することも常に留意しておかねばならないことが分かったとしている。

(3) 実践研究Ⅱ「小学校におけるソーシャルスキル教育の実践と効果」

本研究は、「ソーシャルスキル教育を活用した特別活動の学級活動を行うと、児童の良好な人間関係を形成し、それを維持するために必要な知識・技術の定着を図ることができるであろう」という研究仮説に基づいて行われた。大分県内の小学校第3学年28名の児童に対して、学級活動の時間にSSEを45分×3回実施した。ターゲットとしたソーシャルスキルは、事前のQ-Uアンケートの「学級満足尺度」の結果を基に、研究の実施者と対象となった学級の担任で協議を行い、「集団の一員として生活するうえで基本になる聴き方というスキルを、三つのルールを明確化した活動を通して、あらためて身につける」「適切な質問の仕方を身につけ、相手にいい気持ちで協力してもらえるようになる」「相手の気持ちや立場を尊重しながらお願いする方法を身につけ、頼みを聞き入れてもらうことのありがたさを知る」とした。SSEの実践の事前及び事後にQ-Uアンケートを実施して、SSEによる指導の効果を検証した。

その結果、「学校生活意欲尺度」の学校生活意欲総合点の平均、ヒストグラム及び「学級満足度尺度」の分布状況ともに指導の前後において有意差が認められるほどの変化はなかった。つまり、本研究でのSSEの実践ではQ-Uアンケートで検出できるほどの効果はなかったということである。そこで、本研究では「学校生活意欲尺度」における学校生活意欲総合点について個々の児童ごとに事前事後の比較し、SSEの指導前後における学校生活意欲総合点の差が+5以上及び-5以下の児童である3名及び2名を抽出して、このような有意な変化が認められた理由について考察している。最終の授業で用いたワークシートの振り返り欄の記述された

文章の文節数の多さ及び内容を分析したところ、+5の児童3名は、他の児童に対して有意に多い文節数の文章を記述し、内容においてはターゲットスキルを具体的に書いていた。このことからSSEの指導に高い意欲をもって参加して、授業でのターゲットスキルが意識できる児童には効果があることが分かったとしている。そのためには、SSEにおけるインストラクションやモデリングの際に、児童たちに十分に自分の役割や活動の仕方を考えさせる時間を取り、児童自身が活動に意欲をもつことが重要であるとしている。

(4) 考察

「実践研究Ⅰ」及び「実践研究Ⅱ」はともに、特別活動の学級活動「(2) 日常生活や学習への適応及び健康安全」の「望ましい人間関係の形成」において、Q-Uアンケートを児童理解として実施し、SGEまたはSSEを学級活動の授業として45分×3回の指導を行っている。また、Q-Uアンケートを指導の事前事後に2回実施することで、指導の効果を検証している。

結果は「実践研究Ⅰ」及び「実践研究Ⅱ」はともに、学級集団全体に大きな変化は見られなかった。しかし、個々の児童を分析すると「望ましい」変化を見せている児童が少なからず存在することが分かっている。これは学級集団全体に変化を及ぼす前の萌芽とも考えられる。そこから「望ましい」変化を学級全体へ広げるための課題も明らかになってくる。

それは第一に、学級活動で学んだことを各教科等や朝の会等の他の教育活動で定着を図ることである。実践研究では3回の指導しか行っていない。しかし、わずか3回の指導とはいえ、学級活動は各学年における総授業時数を35時間としており、この授業時数から考えると一定の時間数の指導を行っているといえる。つまり指導の回数を増やせば解決するというのではなく、学級活動で学んだことを他の教育活動の時間で使う機会を意図的かつ計画的に設けることで指導の効果を高めることである。つまり学級

経営の中にこれらを計画的に取り入れておくということである。

第二に、学級活動の授業の終末における振り返りの充実である。SGEでは活動の一つとしてエクササイズを実施時に感じたことや心の動きを、グループの中で話し合わせたり、振り返りカードに記入させたりするシェアリングがある。SSEでは子どもが実行したスキルに対して、適切である場合はほめて、不適切である場合には修正を加え、さらに、子どもたちがスキルを実行してみようとする動機を高めるフィードバックがある。シェアリングやフィードバックから授業で達成できたことやできなかったことを児童に自覚的に意識させて他の教育活動の時間にこれらの指導の成果をつなげていくことである。

第三に、限られた回数の指導で効果を一層高めるために、学級活動の授業に対して児童が意欲的に取り組めるように学級集団の状態に応じた工夫を行うことである。Q-Uアンケートを活用して、学級集団の状態に応じたSGEのエクササイズやSSEのターゲットスキルを選定し、SGEやSSEがもともと備えている実際に身体を動かして体験することによって学習成果を得るという特性を活用した指導を行うことにより、児童が意欲的に分かりやすく学ぶことができるのである。

9 まとめ

本稿では、前半において小学校の教育課程における特別活動の意義と役割について、平成20年3月の小学校学習指導要領の改訂のポイント、学級経営、生徒指導及び道徳教育との関連から考察を行った。特別活動は小学校教育では特に重要な役割がある学級経営の充実において、学習指導と生徒指導の両輪を結ぶ大切な領域であることを明らかにした。後半においては、特別活動の目標の中心的な事項である「人間関係」の形成を図るための具体的な指導内容である学級活動の「望ましい人間関係の形成」について2つの実証的な実践研究が明らか

にした知見から学級活動における今後の課題を明確にした。

日本社会の中で子どもを取り巻く環境は一層激しい変化を見せている。このような社会に対応できる「生きる力」を育むためには、多様な集団による活動を計画的に実践することができ、「なすことによって学ぶ」という方法原理によって体験的に学習の深化を図る特別活動が一層重視されることは確実である。これからの小学校教育の中で重要な役割を担う特別活動においてその中心となる内容の学級活動で、本研究で明らかにした課題の解決を目指すことにより、「望ましい人間関係の形成」を図る指導が一層充実するであろう。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会、幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）、2008、http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf（2014年10月28日取得）。
- 2) 前掲書、p. 61.
- 3) 前掲書、p. 61.
- 4) 文部科学省、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）、2008、p. 112.
- 5) 前掲書、pp. 112-114.
- 6) 山口満、特別活動の歴史の変遷、改訂新版特別活動と人間形成、2010、pp. 34-37、学文社。
- 7) 前掲書、pp. 37-47.
- 8) 文部科学省、小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年8月）、東洋館出版社。
- 9) 前掲書、pp. 20-21.
- 10) 前掲書、p. 21.
- 11) 文部科学省、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）、2008、p. 16.
- 12) 文部科学省、小学校学習指導要領解説総則編（平成20年8月）、2008、p. 67、東洋館出版社。
- 13) 文部科学省、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）、2008、p. 115.
- 14) 国立教育政策研究所教育課程研究センター、楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編、2014、p. 25、文溪堂。
- 15) 文部科学省、生徒指導提要、2011、教育図書。
- 16) 前掲書、p. 1.
- 17) 国立教育政策研究所教育課程研究センター、楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編、2014、p. 6、文溪堂。
- 18) 文部科学省、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）、2008、p. 13.
- 19) 前掲書、p. 102.
- 20) 国立教育政策研究所教育課程研究センター、楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動小学校編、2014、p. 6、文溪堂。
- 21) 文部科学省、小学校学習指導要領（平成20年3月告示）、2008、pp. 112-113.
- 22) 文部科学省、小学校学習指導要領解説特別活動編（平成20年8月）、p. 35、東洋館出版社。
- 23) 前掲書、p. 37.
- 24) 前掲書、p. 38.
- 25) 國分康孝、エンカウンターで学級が変わる－グループエンカウンター体験を生かした楽しい学級づくり小学校編、1996、図書文化社。
- 26) 國分康孝・小林正幸・相川充、ソーシャルスキル教育で子どもが変わる－楽しく身に付く基礎・基本、1999、図書文化社。
- 27) 新城浩仁、一人一人の児童が互いに認め合う集団を目指して－構成的グループエンカウンターとQ-Uを用いた学級活動、平成25年度修了論文集、2014、pp. 81-94、別府大学短期大学部専攻科初等教育専攻。
- 28) 神田文聡、小学校におけるソーシャルスキル教育の実践と効果、平成23年度修了論文集、2012、pp. 1-14、別府大学短期大学部専攻科初等教育専攻。
- 29) 河村茂雄、学級づくりのためのQ-U入門、2006、図書文化社。
- 30) 河村茂雄・藤村一夫・粕谷貴志・武蔵由佳、Q-Uによる学級経営スーパーバイズガイド、2004、図書文化社。